

## ホタルの最期

ある日のこと、帰宅するとテレビで NHK 特集が放映されていました。着替えながら何となく観ているうちに、その感動的な内容に引き込まれ、気がつけばワイシャツを片腕だけ脱いだ格好で、テレビの前に陣取っておりました。番組は、四国を流れる川の自然を長期にわたって撮影している、カメラマンの T さんの写真を中心に構成されたものです。美しい詩のような映像の中、私の心は一枚の写真に憑りつかれました。その写真を診療所内に掲げて、病む人々に見てほしい。少ない人脈を頼りに T さんの連絡先を調べ上げ、自分の思いを文章にしてお送りしてみたのです。すると T さんからは、お人柄が溢れんばかりのお返事が届き、画像も同封されておりました。教えて戴いたプロ使用の印刷会社でパネルに作り上げると、神々しいほどの美しさに私はしばし言葉を失ったのです。

いま当院の待合いに掲げるその写真は、青の背景に黄色のラインが不規則に走る画像です。小さなお子さんが、「夜空の雷！」と言っていたことがありました。よく見ると青の背景の中に川底の岩が見て取れます。実は川面に浮かんで、流れに身を任せたホタルを上から撮影した写真なのです。ちょうど夜の道路をシャッタースピードを遅くして撮影した時に、

著作権に抵触するため掲載不可

車のライトが筋状に写ると同じ理屈です。T さんのお手紙には、撮影した時の情景が抒情

豊かに表現されていました。少し長いのですが、以下その抜粋を引用させて戴きます。「20 年ほど前だったと思います。6月の闇の中で不思議な光を見つけたのがきっかけです。岸部の灌木の上から光り輝く光の玉がふんわりと落ちはじめたのです。光は明滅することなく、木の葉の上で一度バウンドしてゆっくりと川面に落ちていきました…(中略)…もしかするとこれがホタルの最期かもしれない、そう思った私は美しく輝く光を見届けようとホタルと一緒に川を下ったのです。しかし、谷あいの溪流は数十メートルもしないうちに小さな滝になって、それ以上光を追うことができませんでした。滝の上から身を乗り出して下方を見ていたのですが、驚いたことに小さな光は滝壺の水中深く、激流にもまれなが

らも、なお強い光を放っていたのです。それがホタルの最期でした。どんな小さな生物でも、死んでいくときは重く、悲しく、さびしいものです。しかしきらめくホタルの死は季節の移ろいの中で一種のすがすがしささえ感じる美しさを持っています」。

ホタルというと、かげろうや蟬のように、はかなさの象徴として扱われます。でもその生態には、驚くような生きる力がみなぎっていたのです。確かにホタルは、交尾を終えると力尽きて飛ぶ能力を失います。ところが、そのまましばらくにして次の世へ移ろうのではありませんでした。体力が失われたその時を境にして、明滅することを止め強く輝き始めるのです。しかもそれまでに無い最も強い輝きを以て、今生の最期に自己の実在を確認するかのように、いのちの光を放ち続けるのです。確かに診療所の写真を見ると、黄色い光のラインは途切れていません。儂いのちに迫りくるような、青くて冷たい川底の石を背景にして、その光のラインは太くてとても力強い軌跡を描いています。私はこの写真を見ていると、このホタルが自分に語りかけてくるような錯覚に陥ります。「これが自分の生き様だけれど、あなたはどうか。どのような生き方をしているのか」。小さな世界で起きている出来事に気づくとき、生命の真実から眼をそらさないその営みに、心を揺さぶられるような思いが致します。

人生には紆余曲折がつきものですね。社会生活でも、その時に応じて浮き沈みはありましよう。しかし、それまでがどうあれ、誰も後半生には輝くことが出来るのだと思いますし、そうあらねばならないとも思います。むしろそのとき輝くために、それまでの人生をどのように構築していくべきかを考えることが大切ではないでしょうか。私が今回のホタルの生態で特に感銘を受けたのは、誰にも注目されない場所で孤独に耐え、密かに輝いていたという事実です。人様に気づいてもらいたかったり評価されたかったり、私たちにいついっぼけな性根が出てしまいがちです。しかし他人の眼よりも、自分が納得できる形を求めていけばよいのです。だからこそ T さんの瞳には、ホタルの最期がすがすがしく映ったのだと考えます。ホタルの最期は病む人だけではなく、道を見出せなくなった人や定年を迎えた方など、自信を失いかけた多くの人々の生き方に、示唆を与えてくれると思います。